

# 視 座

## 死因は「老衰」について考える

宮城県医師会理事

日 野 宏

近年、老衰（英語：senility）を死因とする「老衰死」が増えてきています。厚生労働省の調査によると、2018年、老衰は脳血管疾患を抜いて、死因の3位に浮上して以来、2022年まで5年連続で1位は悪性新生物（死因の24.6%）、2位は心疾患（高血圧を除く）（同14.8%）、そうして3位が老衰（同11.4%）でありました。

しかしながら、「老衰」は実は世界では一般的な死因ではないのです。世界保健機構（WHO）による世界の死因上位10位（2021年）に老衰は無いのであります。小生が平成5年に警察医を拝命した時には、「老衰」という死因は無かった、と記憶しています。先日、我々宮城県警察医会が日頃お世話になっている東北医科薬科大学法医学教室の高木徹也教授にお伺いしたところ、「確かに、以前は老衰という死因はありませんでした。老衰という言葉に当てはまる死因として、“加齢により心身の能力、臓器が衰えることによる死亡”と定義されていました。WHOの国際疾病分類（ICD10）に「老衰」が加えられたのは最近のことです。」とのことでした。

ウィキペディアによりますと、“「老衰」とは、生物学的・医学的には加齢による老化に伴って個体を形成する細胞や組織の能力が低下することである。恒常性の維持が困難になることが原因である。老衰によって生命活動が終わること（死ぬこと）を、老衰死とも言う。”と、書いてあります。前述のICD10とは、International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problemsの略で、日本語では「国際疾病分類」と呼ばれています。ICDは約14,000項目より構成され、1900年（明治33年）に初めて国際会議にて承認され、日本でも同年から導入されました。ICD-10は、世界保健機構（WHO）が1992年に刊行した国際疾病分類第10改定をいい、日本国内では1995年1月から「疾病、傷害及び死因の統計分類」として公的利用が始まりました。「老衰」は、そのICD-10の中で、2015年に“Age-related Physical debility”（年齢による身体の衰弱）という疾患コード（R-54）があり、日本ではこれを“老衰”として採用されたものであると考えます。

以前、日本医師会主催の上級死体検案研修会で、「老衰の使い過ぎには懸念が残ります。」と言われた某大学医学部法医学教授がおられました。その教授は、「医師や医療スタッフが高齢患者の不調の原因を見つけようとしなかった、あるいは有効だったかもしれない治療を断念した可能性を匂わせる場合はなおさらである。」と指摘していました。

そもそも日本の医師が死亡を診断する目安としては、厚労省の「死亡診断書マニュアルがあるが、死因としての「老衰」は、高齢者で他に記載すべき死亡の原因がない、いわゆる自然死の場合のみ」としている。

しかしながら、小生は「老衰死に明確な診断プロセスは存在しない。」と考えています。小生も老人ホームや自宅に在宅往診診療をしていますし、警察医もしていますので、年間60～70件程死亡診断書もしくは死体検案書を書いています。が、「老衰死」と診断したのは1件のみでした。前述の高木教授もご自身の東京都監察医務院や東北医科薬科大学での解剖経験から、「老衰死」と診断されたご遺体を解剖すると、虚血性心疾患や脳梗塞、特に肺性心が多かった、とおっしゃっていました。肺性心は「肺実質・肺血管病変あるいは肺機能障害により右心負荷が生じた結果、右心室に構造的・機能的障害が生じた病態」をいいますが、初期症状は患者さんの肺の基礎疾患による顕著な呼吸困難や労作時の疲労といった「右心不全」の症候がみられます。

「老衰死」という死因は、医療・介護の現場では、家族の心情にも配慮し、その時々で状況で対応を判断しているのが現状ではないでしょうか。日本で老衰死は、「天寿を全うした」といった前向きな印象を介護してきた家族に与える場合が多いからだと思います。また、お年寄りの体の機能がだんだん弱り、看取りに向けた方針を相談する際には、病気の罹患の可能性があっても、検査や加療が生活の質を下げると判断すれば、「老衰」とする場合もあると考えられます。

ただ、入れ歯の噛み合わせを改善しただけで食欲がもどり、体力が回復する事例もあり、老衰と診断するには、身体の状態を丁寧に把握する必要があると考えます。一方で今の医学教育では、老衰死について学ぶ機会がほとんどないのが実情であると思われれます。

小生は、老衰の診断について、ある程度の標準化が必要だと考えています。死生観にも関わる複雑なテーマであり、医療関係者だけでなく、市民・マスコミなどいろいろな属性の人たちで、老衰死について議論を深めることが必要であると考えます。

